

3年制施設における臨地実習

Clinical training of three-year educational facilities
in medical technology education

さん どう まさる
山藤 賢¹⁾

[臨床検査 59 : 894-898, 2015]

Point

- 現在の臨地実習において生じている期間や内容の問題については、3年制教育機関(専門学校・短大)と4年制教育機関(大学)という教育体制の違いだけではなく、指定校と承認校という教育施設の成り立ちの違いが大きく影響している。法的な整備がされていない状態のなかでは、臨地実習の位置付けは各校の考え方に大きく影響されている。
- 臨床検査技師は何をもって臨床検査技師であり医療人なのか。国家資格をもっていること、国家資格を取るための勉強だけに価値があるのではない。医療人として一番大切なことは“人の心に寄り添うこと”であり、そのための教育内容に各校のアイデンティティーがあり、臨地実習はその大きな役割を担っている。
- 3年制の専門学校である昭和医療技術専門学校においては、臨地実習を非常に大切な期間と捉えており、現在、全国でも最長の6カ月間行っている。“全員卒業・全員合格”というスローガンのもと、国家試験の結果も残しつつ、そこには座学だけではなく臨地実習の経験も大きな価値として捉え、“一人で生きていく力と心の優しさ”を兼ね備えた医療人の育成に励んでいる。

Keywords

臨床検査技師教育, 臨地実習, 臨床検査技師養成校指定規則, 3年制教育, 医療人

はじめに

まず、今回、“臨地実習で学生に何を与えることができるか”というテーマでの執筆の依頼をいただき、あらためて、臨地実習についての私(私どもの教育施設)の考えを整理することができました。そのような機会を与えてくださった編集室と、本特集企画の立案者である三村邦裕先生に深く感謝いたします。執筆予定者の先生方のお名前を拝

見したところ、各現場で一線級として活躍されている高名な先生方ばかりであり、現場における知識、技術、役割、仕組みづくりなどのお話は、私の及ばぬところであると同時に、先生方のところで十分に語りつくせられるだろうという、私のもち前の手抜き精神から、今回は、まさにいただいた“3年制教育施設における”本校の考え方に限局

1) 昭和医療技術専門学校 学校長 〒143-0024 東京都大田区中央 3-22-14

して、私的な意見を書かせていただく旨、お許し願えればと存じます。

“学生に何を与えることができるのか”というテーマを、私ども教育施設の立場からの見地で考えれば、“臨地実習先の病院と協同しながら、臨地実習で学生に何を会得してきてもらいたいか”ということではないかと思えます。しかし、残念ながら、自省の念も込めながらになります。臨床検査技師における教育機関は、現在、統一した臨地実習の概念をもっていません。期間も内容も、臨地実習に関する思いも、それぞれが千

差万別な状態です。概要は後ほど述べますが、それでは、何をもち臨地実習といっているのか、それが、各学校が本来もつべき、学校としての理念です。しかし、それは、学校ごとで違います。ですので、このような題目で執筆させていただくにあたって、私が書けるのは、実際には、自分のところの教育機関に関してだけになります。そのあたりを了承していただきつつ、そこから話を波及していただき、大きく3年制教育の一部として捉えていただけると幸いです。

臨地実習における本校のあり方

初めに、結論から申してしまいますが、医療人になるにあたって、一番大切なことは何かという問いに対し、私は、いつも、“人の心に寄り添うこと”と学生に伝え、講演などでそう述べています。なので、それが臨地実習において学生に得てもらいたいことの一番のものになります。“人の心に寄り添うこと”は弱い存在である患者さんの傍らに立ち、寄り添うことのみならず、同じ医療人同士、一緒に働くスタッフ間、仕事および私生活における人間関係も同様です。医療人として、そもそも本来もつべき資質といってもよいでしょう。“人の心に寄り添うこと”をこれからなりわいとする学生にとって、学生時代にそれを最も身に付けられる機会はどこか。それが臨地実習であると考えています。だからこそ、本校におきましては、6カ月間と、現在全国でも最も長い、病院における臨地実習を行っており、本校教育のなかでも、大変重要視しています。それが本校の“あり方”だからです。

以前、とある大学の教員の先生から“学生時代から、そんなに病院での実習を行う必要はない、あいさつや礼儀なども学ぶ必要がなく、実際に働いてから職場が教育すればいいんだ”ということ

を言われたことがあります。それは、確かにそうかもしれません。そして、その学校の考え方かもしれません。それは各学校の“個性”ですので、私は、否定するつもりはありません。ただし、一医療従事者および教育者の立場でいわせてもらえれば、これは、全くナンセンスな話であり、それで全てが成立するなら、教育機関も教育者も存在意義がなくなってしまいます。知識と技術を優先とするのであれば(最近では技術すらないがしろにする傾向にあります)、そもそも医療人になる必要はなく、研究者を生み出すだけになってしまいます。それはそれでいいだろうという声も確かにあります。しかし、本当にそうであるならば、では臨床検査技師というプライドとアイデンティティーはどこにあるのでしょうか。その差別化意識をもたず、知識優先の学歴至上主義は、医療の現場には全くそぐいません。これから先の高齢化社会、医療の必要度、チーム医療の推進という観点からも、現場で活躍する臨床検査技師の多様性を狭めることにつながります。

私どもは、臨地実習で“人として厚み”を得て帰ってきてもらいたいと学生を送り出しているのです。

臨地実習における3年制施設と4年制施設との違い

3年制施設としていただいたテーマですので、3年制施設と4年制施設の臨地実習における法的な違いについて、まずは簡単に述べます。しか

し、その前に、3年制と4年制というくくりで、今回テーマをいただいているのですが、臨地実習においては、正確にはこのくくりで違いを述べる

ことはできません。違いがあるのは、厚生労働省の指定規則による学校なのか、文部科学省による承認校としての学校なのかによります。

臨床検査技師養成校において、指定校といわれる学校は、3年制の全ての学校(全ての専門学校と短期大学)であり、大学に関しては申請によって許可が下りれば指定校となります。しかし、現在、大学で指定校であるのは、神戸常盤大学1校のみです。したがって、正確には、“全ての3年制の養成校と一部の4年制大学”と“ほとんどの4年制大学”の違いについて述べるということになります。このあたりは、複雑かもしれませんが、正確にわかっていないと、よくいわれる臨地実習問題の本質がわからなくなってしまいますので、まずここで説明しておきます。しかし、このいただいたテーマで述べるうえでは、ややこしい表現になりますので、以下、3年制、4年制というくくりで表現させていただきますが、神戸常盤大学においては指定校であるという認識で読んでいただけたらと思います。

次に、全体的な傾向ですが、最近では、以前に比べ、各校とも臨地実習期間は、短縮傾向にあります。少し古いデータしかないのですが、少なくとも渉猟する一番近い資料では、3年制教育施設と4年制教育施設においては、臨床検査学教育協議会アンケート(2009～2010年)によれば、その臨地実習期間はそれぞれ3年制が平均81.1日、4年制が平均46.7日となっています。この平均日数の違いは何かといえば、これが各教育施設の成り立ちが影響している部分です。全ての指定校は、厚生労働省の指導により、その必要とされる臨地実習単位は7単位(315時間・約52.5日以上)となっています。それと比べると、4年制施設は、文部科学省の承認校であるという成り立ちから、臨地実習日数のしほりに同様の制限がありません。そのため、大変短い実習期間の大学も見受けられます。誤解がないように述べますが、それだから、よいとか、悪いとか、そのようなことを論じるつもりではありません。それは各学校の考え方の違いです。しかし、そのような要素の違いもあります。各校には、その日数を設定できる自由があります。このアンケート時におきましては、3年制の学校でも、その実習日数には、

53～124日まで各校で幅がありました。4年制施設においては、実習日数として、20～52日の学校がほとんどを占めており、3カ月以上の実習を行っている施設は5校ほどで、最長で70日程度でありました。かなりの幅がありますが、これらは法的には、全て認められている範疇なのです。よく、実習期間の統一化ができないのかという議論が、実習先からも出てきますが、そろわない背景にはそのような事実があるということをもまずはご理解いただきたいと思います。

最近では新設の大学も増え、また指定校のなかでも実習期間を短縮している教育機関も増えてきましたので、現在は、おそらく平均実習日数は全体としてさらに短いものになっていると考えられます。3年制施設の先生方に短縮理由を伺うと、その理由として、①国家試験の準備のため臨地実習を短縮した、②最近の学生気質では以前のような長さの実習は耐えられない、③実習費の高騰、などの声が聞かれることがあります。それらの理由は確かにその通りだと思います。だからこそそれぞれの学校の実習日数には、最終的に各校の方針が大きく影響しています。

それでは、指定校である本校は臨地実習をどのように捉えているのかという話に入ります。前述しているように、本校は臨地実習に重きを置き、現在、全国でも最長の6カ月間行っています。しかし、これも、別にただ長いことがよいといっているのでは決してありません。そこには各学校による方針が入ってしかるべきでありますし、現況、それでいいのだと思っています。ただし、本校におきましては、就職時の“即戦力”としての要素と、就職後の自己研鑽による“成長力”、その2つを合わせて“現場力”と名付け、現場力の高い学生を育てたいと考えています。よく3年制施設の卒業生は現場での即戦力として期待されているというような声を聞きます。確かに、そのような要素はあり、私どもの施設でも知識と技術を兼ね備えた卒業生を送り出すべく尽力しています。現在では、自動化の流れのなかで、技術的な要素の必要性は、以前より薄くなってきており、臨地実習にてもその必要性が取り上げられることがあります。

しかし、大事なことはその物事の、原理原則であると考えています。機械を動かすのは人間で

す。トヨタ自動車が大事にしている「“自動化”ではなく、あくまでもニンペンのついた“自働化”」という言葉を重ねるものとして私は考えています。技術習得に関しては、臨地実習前後に、学内にて客観的臨床能力試験(objective structured clinical examination: OSCE)を行い、知識と技術が、きちんと身に付いているかどうかの評価なども大切にしています。しかし、最終的に大事なものは知識と技術のみではありません。われわれ医療従事者は、白衣を着たその日から、患者からみれば、1年目も10年目もない、ただの一医療従事者としてしかみられません。そのなかで必要な“即戦力”という要素は、知識や技術のみならず、その医療人としての振る舞いやあり方の部分が一番大切であります。そして、一生にわたって勉強を続け、成長をしていく必要が医療人にはあります。そのような“人間力”を身に付けた、そしてこの社会で“一人で生きていく強さ”と“心の優しさ”を兼ね備えた医療人を育てるために、われわれは学校方針として臨地実習の期間を定めています。そして、ただ長い期間ということには全く意味はなく、大事なものはその中身です。そのため、内容を各施設と深く議論し、毎年ブラッシュアップしているのです。

しかし、臨地実習の充実のみを心掛ければよいわけではなく、教育施設としては、最終的な結果も求められます。前述したように臨地実習期間の短縮化に、国家試験の合格率などの話もですが、私どもの施設におきましては、幸い、この3年間ほどは、国家試験の合格率は100%となっています。その内容も、3年次になってから1人の留年生も出さずに全員が卒業試験をクリアし、全員が国家試験に合格している、本校のスローガンである“全員卒業・全員合格”という形での結果です。その要因には、臨地実習が大きくかかわっていると私どもは信じています。学生に、自信をもって、半年間の臨地実習に集中して励みなさいとっています。そこで得られた、座学ではない、生きた勉強は、国家試験の合格にも必ずつながっているからです。

逆に、学生を預かっていただき、ともに育てていただいている臨地実習先に何を求めるか、というディスカッションもよく行われます。これは全



学生と教員によるキャンプ

当校では臨地実習の終了後、打ち上げと国家試験合格への切り替えも兼ねて、全学生と教員で“同じ釜のメシを食う”2泊3日の富士登山キャンプへ行きます(2014年10月)。

くの協同作業ですので、われわれ教職員は、毎年、臨地実習前に学生とともに実習先にあいさつに訪れ、実習中にもその様子を伺いに行き、臨地実習終了後にもあいさつに伺うとともに、担当者連絡会議という形で、技師長先生方を中心に、臨地実習先の先生方を招き、議論を積み重ねています。毎年、お忙しいなか、30名前後の先生方に参加していただき、大変深い議論の場となっています。

以前に3年制教育施設の集まりで、どのような形で報告会のようなものを行っているかというアンケートをとったことがあるのですが、そのなかでも出席人数が多い報告会としては、本校が随一でありました。そのことも、本校が臨地実習に重きを置いているということの証であるかと思います。

そのような、本校の担当者連絡会議のなかでも、中心的な役割を担ってもらっている東京医科歯科大学附属病院の萩原三千男先生(918~923頁参照)の言葉に私は感動したことがあります。それは、「忙しい業務のなかで、学生の世話をすることに異議を唱える職員がたまにいることが正直あるのですが、しかし、それは臨床検査技師としてやらなければならない業務や義務としての一環なんだと説明しています」という言葉です。それは、後進を育てるといふ臨床検査技師としての義務である部分であると私も思います。学生の面倒をみる必要はないという考えを、正当なものであると考えましょう。そうすると、今後就職してくる学生は、全て臨地実習を経験してこない学生と

なります。そのような者が就職したときに、臨地実習生を預かりたくないといっている職員はどう思うでしょう。学びを得ていない卒業生に対して、できない新入職員というのでしょうか。そこに矛盾が生じます。結局は、全ては自分に返ってくるのです。だからこそ、臨床検査技師の未来を創るという使命感のもと、臨床検査技師として、後進を育てるということを倫理観として正しく行っていく必要があると思います。その考えが、将来的に臨床検査技師の地位を高めることにつながることでしょう。

幸い、私どもがお世話になっている施設の技師長先生をはじめとする実習先の先生方は、そのような思いを共有し、ともに前に進んで行っていたいでいます。もちろん、私どもの施設、学生にいたらない部分が多いのも承知のうえで、大きな心で学生の指導にあたっただいており、感謝が尽きません。お忙しいなかで、学生のために指導していただいていることに、心からの感謝と尊敬の念を抱き、実習に向かうことは、われわれ教員のみならず、学生もその根底にもっていただかなければならないことであり、実習前に、われわれは、“本校の臨地実習のあり方”として学生に時間を掛けて説明しています。

今回テーマとしていただいたなかで、かみ砕い

おわりに

最後に全くの私見を述べさせていただき終わりにしたいと思います。わが国のビジネスの創生に大きな影響を与え、財界人として著名な渋沢栄一氏は、ビジネスや人生としての概念として“論語と算盤”という考え方の重要性を述べています。これは、わかりやすくいえば“「道徳」と「商才」、その両方が必要だ”ということであり、そしてこれは結局は“「志」と「振る舞い」”が大事なのであると理解することができます。志だけがあってもダメで、そこに振る舞いや行動が伴わないと物事は実現できません。また振る舞いや行動だけが見掛け上よくても、根底にある良心がゆがんでいては、正しいことを起こすことはできません。

私は医療人としての、臨床検査技師が、この言葉に全く当てはまると考えています。

て考えてみると、あらためて大事なことは、臨地実習先の病院が、“何を与えてくれるのか”ではなく、われわれ教育施設が“何のために行かせているのか”を明確にすることだという思いにたどり着きます。

それは、学校のアイデンティティーといわれるものであり、各学校が本来掲げていなければならない旗です。

しかし、昨今の大学化の流れから始まる、臨床検査技師教育機関の乱立は、目的をもたず、ただただ少子化を迎えて危機感にかられた大学機関の学生募集のための道具と化している部分もあります。法制度はそこについて行っておりません。臨床検査技師教育の本質的な部分がなくとも、承認科目の申請にて、現在、文部科学省は国家試験受験資格を承認している状態です。

その部分で、われわれ教育施設は、教育協議会という団体のなかで、臨床検査技師教育の位置付け、臨地実習の位置付けを再度明確にし、指定校・承認校のくくりの問題や、教育年限の問題だけでなく、また法律のせいだけにするのでも頼るのでもなく、われわれ自身が、どのような臨床検査技師教育を行い、未来につなげていくのか、自助努力もしつつ、行っていかなければならないことであると、自責の念も込めて思っています。

だからこそ、本校においては、入学時より、あいさつや掃除、礼節などを、勉学と同じくらい大事にし、学校生活のなかでも、そして臨地実習先でも実践を心掛けています。

高い志や良心をもち、そして知識、技術、医療人としての振る舞いを身に付けている臨床検査技師。人の心に寄り添うことができる医療人。現時点での私が、臨地実習を通して、学生に会得してもらいたいことは、そういうことであると、あらためて心に思い、今回このような機会を与えてくださった皆さま、本校教員、関係者、学生たちに感謝の思いを抱きつつ、筆を置かせていただきます。

参考文献

- 1) 山藤賢：社会人になるということ，幻冬舎，2013